

林家の主業構成の変化に見るサラリーマン 林家の増加 2000年林業センサスから

林家の主業の変化を見ると、1990年までは一貫して恒常的勤務が増加し、自営農業が減少している。2000年は「自営農業」と「その他」がぐくられ49.6%となっているが、自営農業のみの数字はおそらく2割前後まで低下していると見られている。従来の農林家がサラリーマン林家に変化している様子がよく見て取れる。

林家の主業構成の変化（全国）

		1960	1970	1980	1990	2000
実数 (戸)	林家総数(5ha以上)	257,349	292,501	289,379	279,143	234,006
	恒常的勤務	13,147	46,509	89,272	115,018	100,549
	出稼ぎ	7,746	3,427	2,981	2,219	1,057
	日雇・臨時雇		17,635	24,501	14,801	8,693
	自営林業	11,622	14,269	9,325	6,982	7,558
	自営農業	201,034	171,752	116,172	82,143	116,149
	その他	23,800	38,909	47,128	57,980	
構成比 (%)	林家総数(5ha以上)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	恒常的勤務	5.1	15.9	30.8	41.2	43.0
	出稼ぎ	3.0	1.2	1.0	0.8	0.5
	日雇・臨時雇		6.0	8.5	5.3	3.7
	自営林業	4.5	4.9	3.2	2.5	3.2
	自営農業	78.1	58.7	40.1	29.4	49.6
	その他	9.2	13.3	16.3	20.8	

注：保有山林5ha以上の林家。

資料：林政総合調査研究所（2002）『林家経済の基礎的研究（1）- 2000年世界農林業センサスの分析 -』
林政総研レポートNo.61 March 2002

一方、2000年センサスの「林家100戸あたり林業従事世帯員数」によると、林業従事世帯員（一年のうち一日でも林業に従事した世帯員数）は、森林所有面積5ha以上層で見ると、100戸あたり、1970年の125.7人に対して2000年は57.0人に減少している。

また、他方「山林作業実施状況」（同セン

サス）で山林作業実施林家率を見ると、「植林」では1960年の50.4%から2000年の6.4%まで激減している。「下刈りなど」を見ると1970年の73.1%から2000年の34.2%に減少している。

農林家からサラリーマン林家へと変化する中で、林業労働が激減し、林業が次第に営まなくなっていく姿がよく出ている。

筆者が2005年に全国の森林組合員、3組合900名に独自に実施したアンケートによると、所有林のうち荒廃している山林の割合は約3割もあった。林業が比較的盛んに営まれている

地域にある平均所有山林面積30.6haの中核的林家においてすらである。山林は施業を放棄され、かなりの割合で荒廃林となっている。またこれらの山林の多くは境界の分からない山林になっているとみられる。山林に長く作業に入らなければ山林は荒廃すると同時に境界も分からなくなるのである。

前述のアンケートで「林業を営んでいることの意識」について499名が回答したが、その内訳は

「林業は営んでいない（山林は放置している）」25.3%、「林業経営は最小限にとどめている」30.3%、「林業経営はほどほどに行っている」23.8%、「林業経営にはある程度力を入れている」18.0%、「その他」2.6%であった。サラリーマン林業経営は業として行き詰まりつつある。（秋山孝臣）